

かけはし

教育学研究科
静岡大学 教職大学院
NEWSLETTER

No. 6

2017年12月8日

静岡大学教育学研究科・教職大学院 〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836

教職大学院に期待すること

宮崎 正

巻頭言

(浜松市教育委員会 学校教育部次長)

平成 21 年度、静岡県教育委員会の教職大学院派遣の担当を経験させていただき、学校教育に携わる人材の育成において、それまでの大学院とは異なる教職大学院のよさと必要性を強く感じたことを思い出します。

今もその思いは変わりませんが、現職教員の教職大学院派遣の意義である、派遣教員自らの教育実践と先進的な理論とを結びつけながら、直面する教育課題の解決に向けて、実現可能な具体策を臨床的に追究することは、教員の資質の向上を図り、確かな指導理論と優れた実践力・応用力を備え、学校において指導的な立場で活躍するための中核的中堅教員を育成するうえで、有効な研修であると考えます。したがって、浜松市からも毎年度、現職教員を静岡大学教職大学院へ5名程度派遣しております。

浜松市では、平成 27 年度より第3次浜松市教育総合計画「はままつ人づくり未来プラン」に基づき、教育理念として「市民協働による人づくり」と「未来創造への人づくり」を掲げ、各学校ではその教育理念に沿った教育活動を進めています。そして、「第3次浜松市教育総合計画」の中では、浜松市が目指す教職員の姿として、「愛情と情熱を持ち続ける教職員」と「専門性と指導力を磨き続ける教職員」の2点をあげています。また、平成 28 年度 11 月に教育公務員特例法が一部改正され、教育委員会と関係大学等とで構成する協議会を組織し、指標に関する協議等を行い、指針を参酌しつつ、校長及び教員の職責、経験及び適性に応じてその資質の向上を図るための必要な指標を定めるよう規定されました。さらに、新学習指導要領への対応も行わなければなりません。

そのような状況におきまして、新学習指導要領への円滑な移行を実現し、目的とする教育効果を達成するためには、今後、各学校において、児童生徒の実態に即した優れた実践事例や関連資料等を蓄積しつつ、授業改善を基軸とした実践的な校内研修の充実を図ることが重要であり、各学校において校内研修、授業改善等を推進する教員の存在が求められます。派遣した現職教員が各学校において、そのような中核的役割を果たし得るよう、教職大学院には、それぞれの教職経験や特性に応じ、専門的かつ実践的な指導を是非とも展開していただくことを期待しています。

また、学部から進学した大学院生、いわゆるストレート・マスターにつきましても、教育に対する情熱、教育の専門家としての確かな力量、そして、人間関係を身に付け、教職大学院を修了し、採用されることを期待しています。

はままつの教育の継承・充実と更なる発展を図るためには、若い世代の人材育成が喫緊の課題であり、静岡大学教職大学院が担う役割は、ますます、重要になるものと考えます。

今後も、養成・研修の段階において教職員大学院と教育委員会とが組織的・継続的な連携と協力を深めていけたら幸いです。



「物事を鳥瞰して捉える目を養うこと」これは、前期の学びを始めるにあたり授業の冒頭で教示いただいた視点です。前期の授業では、教育界全体を見渡して国や県の動向を理解し、現在の教育の課題を把握したり、教育に関する歴史的な背景を理解した上で今後の教育のあり方について考えたりするなど、俯瞰することによって総体を捉える視点を学んできました。また、私たちが教育現場で実践してきたことを理論によって整理し、根拠を持った教育活動が展開できるよう、今後の指導のあり方について再考する視点を学びました。

私たちは、学校組織開発、教育方法開発、生徒指導支援、特別支援教育の4つの領域に分かれ各々の課題について研究を進めています。後期に入り、これまでに学んだことを基盤に現場で実習をさせていただくことで、理論と実践の往還によって学びを深めていく段階です。所属する市町教育委員会の抱える課題に対し、現場と大学院がチームとなって実践的に研究を行う学校等改善支援研究員については、新たな学校づくりや組織のあり方について学び始めました。

私の所属する下田市は、伊豆半島の南部に位置し、豊かな自然に恵まれた温暖な地域です。春や夏には、

自然の美しさに誘われ観光客でにぎわいを見せる一方、人口減少が著しい地域でもあります。そうした中、地域の未来を担う子どもたちを育成するため、下田市は新たな学校づくりに取り組んでいます。伊豆の豊かな自然の中で育つ感性を働かせ、地域の未来をどのように創っていくのかという「創造する力」を育むために、教育内容や教育環境の整備に重点を置いています。「未来の人づくり」「自ら学ぶ人づくり」のために、子どもどのような資質・能力を育むのかという目標を地域と学校が共有し、地域全体で子供の成長を支えていく仕組み作りを模索し始めました。こうした課題に対し、学校等改善支援研究員として新たな学校づくりのための仕組みについて研究しようと考えています。

大学院では、授業や実習を通し研究者や専門家など様々な方面のスペシャリストから学ぶ機会があります。日々の学びの中で出てくる疑問や課題については、院生同士で対話することによって学びを深めることができます。また、大学院の教員と院生がチームとなって課題解決に向けて協働することもできます。こうした環境の中で学ぶことに感謝し、現場へと還元できるような研究を進めていきたいと考えています。

学びの宝石箱

教育方法開発領域 M1 山路崇仁

大学院で学び始めてからこれまでに基盤実習や自主研修などで多くの学校や施設に訪問する機会がありました。学校現場で働いているときには、なかなか訪れることのない訪問先もあり、一回一回が貴重な経験となっています。その中でも特に大きな学びになった訪問先、二箇所を紹介します。

一つ目は富士市立高校です。市役所プラン「究タイム」を参観しました。地域と関わりをもちながら課題解決をしていく探究学習で、自ら課題を見つけ、

関連する情報を収集・整理・分析しプレゼンを行っていました。自分たちの住んでいる地区を活性化させ

るためにはどうすれば良いか、市役所や町づくりセンターの方と話し合いをしたり、実際に地区に行き現状を確かめたりと主体的に活動している高校生の姿に頼もしさを感じました。

二つ目はムンドデアレグリア学校です。実際に参加したポルトガル語の授業が印象に残っています。授業はポルトガル語のみで進められ、言葉がまったくわからないという状況に大きな不安を感じました。同じ授業をもう一度受けたいと言われたら、絶対に嫌だと答えます。これまで日本語の全く話せない外国人児童を担任する機会がありました。その子の気持ちになって準備をしたり、支援をしたりしてきたつもりでしたが、不安を取り除くことは容易ではないと反省ばかりが浮かびました。また、校長先生の講話から「共生社会」について深く考える機会となりました。

教職大学院での学びを子供たちに還元できるよう、学びを深めていきたいと考えています。



修了生奮闘記

川根本町立中川根南部小学校

教頭 鈴木浩孝

2期生 (H22~H23年度) 学校組織開発領域

新学習指導要領が公示され、「対話的で深い学び」「カリキュラム・マネジメント」「英語の教科化」「特別な教科・道徳」などへの対応が求められています。

私が勤務している川根本町では、「学力向上ネットワークプラン」を掲げ、RG授業(町内4小学校での連携グループ授業)や児童生徒1人に1台のタブレットを配付してICT教育に力を入れています。

このように大きな教育改革が進められる中で、私が強く感じていることは、学校教育は先生方の教育や子どもたちに対する熱意と誠意によって支えられているということです。一人一人の先生方の熱意や誠意を生かし、つないで、より大きな力にすることがチーム学校や協働を具現化していくことだと考えます。そのために大学院での学びを通して実感した学び続ける教師であること、物事を多角的・多面的な視点で捉えること、そして、やはり、自分自身の人間性を磨き続けていくことが大切だと痛感しています。目の前の子どもたちの幸せのために、今、自分ができていることを考え、まだまだ迷いながらも奮闘しています。

浜松市立佐鳴台小学校

主幹教諭 湯川靖彦

3期生 (H22~H24年度) 生徒指導支援領域

本執筆原稿内容の目標

- 教職大学院での学びを再構築することができる。
- ◎獲得した学びと現場との往還をすることができる。

学習活動と予想される表れ	働き掛けや指導・支援
1 前時までの振り返りを行う。 2 本時の課題をもつ。	○関心を高めるため「学びの構成図」を提示して前時を振り返る。
④ 筆者が教職大学院で学んだものは何だろう。 また、現場との往還を意識した実践を考えよう。	○つながりが意識できるようキーワードに着目し得る声掛けを行う。
3 各領域の学びを基に考える。 (個) ・ 講義や演習の要点から考えよう。 ・ 内容面だけでなく、見方・考え方の根源的な視点で捉えよう。	○学びの連続性の面で捉える良さを助言する。 ○俯瞰的客観的多面的な思考の重要性を示す。
4 同解決方法の班で交流する。 (関わり合い) ・ 心身の発達や行動特性を学んだ。 ・ 組織開発や教育方法を学んだ。 ・ 生徒指導の課題対応機能向上策。 ・ 特別支援教育の在り方を学んだ。 ・ 大人の学びや社会教育を学んだ。	○同解決方法班での交流後は基本班(異解決方法)に戻り再度交流する協調学習形態の場を設けることで話合いや伝え合う必然性をもたせる。帰属意識や責任感醸成にもつなげる。
5 所属班に戻り報告して話し合う。 (関わり合い) ・ 学びの内容がたくさんあるね。 ・ 内容は違っても視点や見識の広がりや共通し、往還につながるね。	○浜松市 教研研修主任研究部で部長補佐を務めさせていただいた経験を生かし、現在拝命している主幹教諭の立場で①校長教頭を助ける②ビジョンを具体かつ明確に変換して周知徹底③立案企画計画の推進④情報提供共有相談の中核⑤円滑なつなぎ等の重責を担い、遂行で学校教育目標や学校経営目標具現に迫る。
6 全体交流を行う。 (関わり合い) ・ 「人、もの、こと」との出会いを通して捉え直しを図ったり省察したりすることができ、今後に生かし具現化のための方策を見据えた展望ができた。 ・ 「気づき・考え・動く」循環性	○児童の特性実態を多面的に捉え、新学習指導要領に即した教育課程編成工夫、PDCAサイクル有効活用での組織機能向上・研修推進、地域家庭や外部専門諸機関等地域社会教育資源との連携協働強化を視野に入れ取り組む。
7 本時のまとめと次時予告をする。 ④ 文脈に応じて読み解く力、様々な観と多面的見方や先見性、継承と変革(PDCA)、能動的対話的深い研究修養実践、向上心と信頼感、思いやりと協働性、児童保護者地域職員共に安心して楽しい魅力的な学校運営推進を司る重要性を学び、取組姿勢と方向性を再認識・展望できた。	



教職大学院では、院生と教員が一丸となり、「理論と実践の往還」をコンセプトの1つとして日々学びに取り組んでいます。その学びの1つが現場実践研究(アクション・リサーチ)です。多くの実習校・教育機関にご協力いただき、院生が現場に身を置いて、自身の研究課題と現場の課題を照らし合わせながら研究に取り組んでいきます。

私は9月に高等学校での短期の実習を終え、現在中学校に週に1度実習に行かせていただいています。ストレートマスターである私はそもそも現場経験もないため、現場で教員の方々のお話をきけること、児童生徒と直接対話ができること自体とても価値がある学びとなっています。また、実習を重ねる中で、自分が研究を深めていく糸口見つかったり、実際に現場の話の聞くと自分が考えていたことが違っていたりと、新たな見方ができるようにもなります。本当に日々勉強だなと感じます。

これは私が実習先の先生に生徒指導についてイン

タビューをした時のことですが、インタビュー後お礼を言ったところ先生に「こちらにもいろいろと教えていただけると助かります。」と仰っていただきました。この言葉で私は「自分は大学院という場で現場とはまた違う学びをさせていただいている。さらに現場でも勉強させていただいている。ストレートマスターという立場であっても、自分の研究を進めながら、現場に少しでも大学院で得たものを還元したい。」と感じました。「win-win」の関係を作りながら、現場での課題を探って「理論と実践の往還」を目指す、これが教職大学院で行う実習の理想の姿だと思っています。

今後も多くの学校、教育機関等の皆様にご協力ご理解をお願いすることになると思います。その分教職大学院でも、それぞれが研究・勉強を進め、現場に還元できる成果を残して、「win-win」の関係を築いていきたいと、一院生として考えています。

お薦めします ブックレビュー

「教師が育つ条件」 今津孝次郎 岩波新書 2012

本書は、大学での研究職を歴任した後、中学・高校の校長を務めた経験を持つ著者が、現役の教師や、定年退職された教師の声を聴き、様々な視点で教師の質や教育政策の仕組みや方向性などから、教師を育てる制度や教師が育つ環境に検討を加えたものである。大学などの教員養成過程を終えて、教職に就いた後で教師の成長が重要であることを多くの点から再認識し、考えることのできる興味深い本である。

(教育方法開発領域 M1 高橋裕貴)

発行責任者	専攻長	石上 靖芳	編集後記 働き方改革が進む中、「自己研鑽」という言葉をあらゆる場面で耳にするようになりました。現職の教職大学院生は、現場から研修の機会をいただいて今このような学びを実現できています。ある授業で「子供と向き合わない時間の大切さ」について学ぶ機会がありました。それは自分のために、自分を成長させるために時間を使うことが、巡り巡って教育の質の向上につながるというものでした。今ここで学びを今後の教職人生の中で十分発揮し、未来を生きる子供の力へとつながるよう、自己研鑽に励んでいきたいと強く思います。
監修	担当教員	鈴木 秀志	
顧問	M2 代表	村松 邦彦	
編集長	M1	松原祐記子	
副編集長	M1	山下 憲市	
	M1	竹下 雅美	
	M1	山路 崇仁	
	M1	堂前 拓耶	
	ストレートマスター	湯山 理沙	
発行担当領域 (教育方法開発領域) 寺沢 山路 岩倉 高橋 田代			

題字 ストレートマスター 北住 美來

次号発行担当領域は 生徒指導支援領域です

